

戦時性暴力の被害と加害の資料を集めた日本初の資料館

2005.8.1. オープン!

**wam** アクティブ・ミュージアム  
女たちの戦争と平和資料館



〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18 AVACO ビル 2F 休館日 月・火曜日

T E L : 03-3202-4633 FAX03-3202-4634 <http://www.wam-peace.org/>

「女たちの戦争と平和資料館」= WAM (womens active museum on war and peace)がオープンした。戦時下の性暴力の実態を、個人にその体験を口述してもらい記録・保管・分析して、記憶を歴史にしたミュージアムだ。世界のどこにおいても、二度と「慰安婦」問題が繰り返されないための活動の拠点となることを目指している。

館内は他に、「慰安婦」募集に際しての陸運省の通達の写し、中国南部の日本軍から「慰安婦」を集めてほしいという要求に応じる内務省の文書の写し等の資料展示がある。また、「慰安婦」制度における国家責任と責任者の刑事責任を認定した「女性国際戦犯法廷」(2000年)の審理内容や、8カ国の被害と加害兵士の証言等のビデオが視聴できるビデオ・ブースがあり、総合的に「慰安婦」問題に迫ることができる。

WAMの開館には、これまでマスメディアがタブーとしてきた、「慰安婦」問題における「天皇」の責任を明らかにした「女性国際戦犯法廷」の運動を担った人たちが多く関わっている。彼女たちは、「女性国際戦犯法廷」を扱ったNHKの番組改変についてNHKを訴え、その問題はその後朝日新聞とNHKの政治圧力の有無をめぐる争いに発展している。彼女たちの全身全霊をかけているとも思えるこれらの運動は、地味ながら日本を揺るがすアクティブな動きへと転化

しつつある。戦後60年を迎えた今、戦争加害の責任についてアジアの国々から厳しく問われている中で、教科書から「慰安婦」が消され、「新しい歴史教科書を作る会」が主導した扶桑社の教科書を採用する学校が出てきている。「女たちの戦争と平和資料館」=WAMのオープンは、日本が戦争ができる国へ転換されようとしている今こそ動き出さなくては…という緊迫感の中から生まれたともいえよう。

(写真はWAMの資料閲覧コーナーとビデオ視聴コーナー)



西野瑠美子館長は、戦時性暴力の被害回復は、国家がその犯罪に向き合わない限りなしえないこと、日本政府による真実の「謝罪」と反省が不可欠であること、過去の克服のためには過去の加害を記憶し続けていくこと、忘れ去らないこと…。日本社会には未だ「慰安婦は商行為」などという、責任を転嫁する声が後を絶たないが、どんなに否定しようとも、その歴史の事実を消し去ることはできない。どうぞ、被害者の声をきいてくださいと述べている。

WAMの発案者は松井やよりさんだ。亡くなる半年前の2002年6月、まだ病気の気配は感じられない元気な姿で、神戸学生青年センター30周年記念会で講演された。そこで、彼女がまさに命をかけた女性国際戦犯法廷の判決が、日本のマスメディアで取り上げられなかったことについて、「報道されないということは、(ある意味では)無かったことと同じで…」と、無念そうに語られた表情は忘れられない。2005年8月1日、このミュージアムのオープンもまた、報道は限られていた。むくげ通信の読者のかたがたに一人でも多く訪問してほしく紹介記事を書かせていただいた。

大野貞枝